炎症性腸疾患（IBD）センターの設置

炎症性腸疾患にかかわる診断・治療・支援に全人的に取り組む

炎症性腸疾患（IBD）センター　センター長　竹下英次

炎症性腸疾患（IBD）は愛媛においても年々増加し、県内における患者さんは潰瘍性大腸炎で2000人、クローン病で500人とされています。当センターは、潰瘍性大腸炎やクローン病など腸管の免疫異常で起こるIBDの診断・治療と社会生活へのサポートを総合して行っています。

寛解と再燃を繰り返す慢性・難治性のIBDの診療は、消化器内科のみならず、内科・外科・小児科・放射線科など複数の診療科の協力が必要です。治療も医療の進歩によって薬物治療以外の選択肢も多く、複雑な治療を理解し提供する高い専門性が求められます。若年者に多い疾患であることから、治療と社会生活の両立も重要であり、多様な専門職による円滑な連携支援も必須です。当センターでは、センター化によって、専門医・看護師・薬剤師などの医療関係者に加え、栄養士や難病医療コーディネーター、社会保険労務士など多方面からの協力を得て、全人的なサポートを行っています。

またIBDを広く知ってもらうことも大事であると考えます。どういった病気かを広く知ってもらい、診断や治療に繋がりやすくするため、今後広報活動にも力を入れてゆきたいと思います。

PROFILE

たけしたえいじ◎1996年愛媛大学医学部卒業。第三内科に入局、県立中央病院、県立北宇和病院、2005年大学院卒業後は、松山赤十字病院、市立宇和島病院を経て当院へ。消化器内視鏡診断・治療が専門。2020年4月より現職。趣味は音楽鑑賞をしながら、少し遠まわりのドライブ。